

釋迦牟尼如來像法滅盡之記寫真

六世王居如來像法滅盡之記

有于闐國第六代王已而第七代王居日耶龍夕洛國之時彼國有寺名薩  
迦羅轉作新耶去此寺不遠有一山名薩迦耶黎那彼山谷中有一窟深約有七  
層其寺從其師以多拜佛及日月菩薩不測經及星教色等間尊也其後日  
應經年圓轉鞠及百廿日如來像法滅盡時任世誰皆欲滅究竟至其何所  
夫名解說時置漢印諸國  
以塔廟二千子在世然後滅盡寺三千之國其面極州突厥回鹘等處動其于大  
而未後後其法以射擊微微於寺其後其亦皆勤勉此三國中安日疎勤不  
行法欲被假故優塔寺多公焚燒毀滅踏步之棄諸寺衆僧多分移徙于闐國于  
闐塔寺在石芽管依侍之二百五十以出家依二百五十在位受主讓持牛次山寺與劫  
有在私常當展時以為官殿 諸其自感其不也加特于闐塔寺妙法修行法又其於錄  
國名任於世 今時諸國王寺名欲取於于闐國故明詳終何王等者即占于闐  
作大施主不毀不滅常當供養當不之特赤面國王有大威勢多復餘國以為自境  
今時有一行於赤面國受主為王行日國內廣行妙法絕於他國請其法師及修  
赤面國中建立精舍造宇塔波度 國王大臣并諸國人廣行正法 今時于闐  
屬彼赤面王以廣行正法志在塔寺 國王大臣并諸國人廣行正法 今時于闐

## 口繪釋迦牟尼如來像法滅盡之記解説

文學博士 羽 田 亨

西藏の聖典丹珠爾タンジュールの中に于闐國懸記の一篇が存して、早くより歐米東洋學者の注意を惹いて居つたことは周知の事實である。昨年其の邦語譯が我が寺本師によつて此の于闐國史中に收めて公刊せられたのは、學界の慶事である。先年佛のペリオ教授が敦煌の石室から獲た多くの遺書の中、卷首に「釋迦牟尼如來像法滅盡之記」と題し、卷末には「釋迦牟尼如來像法滅盡因緣一卷」と識した短篇があつて、今は巴里の Bibliothèque Nationale の所藏に歸して居る。教授は此の一卷が西藏語の于闐國懸記の漢譯本であることを看破して、一九一四年に之に關する報導を成し (Journal Asiatique, Série XI, Tome IV, No. 1, p. 144) 。

○年六月巴里の亞細亞協會に於る講演にも之を披露した。(Ibid. Série XI, Tome XVI, No. 2, p. 55) 茲に掲げたのは其の卷首に當る一部分であつて、題記の下、「國」字の上の文字は分らないが、  
|| 或は此の寫本には初めから文字は書かれて無かつたかとも思はれるが || 大蕃即ち西藏を意味する二字の存した事、若くは存すべきは疑無き所で、大蕃國大德三藏法師沙門法成譯と讀まるべきである。

法成といふ人については、またペリオ教授の考が一九一四年に發表されて居る (J. A. 1914, Série XI, Tome IV, No. 1, p. 142-143) 。

自分の巴里で見た薩婆多宗五事論卷一にも甘州修多寺法成譯を

見えて居るが、教授の言ふ所によると、西藏が甘州地方を占領した西紀八世紀の半頃から九世紀の半頃にかけて、この甘州の修多(sutra)寺で、西藏語や梵語の佛典を、漢文に譯したものが澤山あつて、其の多くは法成の手に成つて居る。法成は西藏語の Chos Grub に當るから、甘珠爾カンジュールの中にある金光明經や觀音に關する三種の經などを譯して居る Gos-Chos-grub と同人だらうといふ。此の滅盡記の譯された時代に就いては、九世紀の初半と見て居る。

Bibliothèque Nationale のペリオ氏蒐集敦煌出土漢文書の目録にも、法成譯の瑜伽論、瑜伽師地論、薩婆多宗五事論、同別本、及び此の滅盡記などが見える。當時甘州の如き、政治の上からも文化の上からも、諸國の勢力を感受するに鋭敏であつた場所に居つた西藏人が、藏文は無論のこと、漢文にも梵文にも通じて、各々一方から他方にの

傳譯に従事して、その業績を今日に傳ふるを得たのは、甚だ興味ある事件である。然も漢文の藏經中には其の譯の收められなかつたのが、偶然の事情で、かく世の中に出て、千載の後人を驚かすのは、傳統的學問に對する一種の脅威であり、また諷刺でもあるやうに思はれる。自分は獨り此の滅盡記のみならず、この譯師の手に成つた他の遺文をもすべて現存のものと比較して、發明の資に供することにする積りである。

此の寫本を卷軸の形で、紙の大きさ上下八寸五分、首尾の題記を入れて六十九行、そうして寺本師の譯出された于闐國懸記第一章の末、即ち第十頁の五行目Ⅱ氏の註記による原本四四七頁を終つて四四八頁の初の部Ⅱで終つて居る。原典乃至ロツクヒル氏の抄譯、寺本氏の全譯など、比較して研究の資に供すれば、發明する處甚だ多いと思ふ。寫眞は自分が巴里で寫したものの、原板は今東京モリソン文庫の所藏に係る(十二月十二日稿)